

筑波 しらぎく

コロナ禍に思う

筑波大学医学群長

田中 誠

新型コロナウイルス感染症のパンデミック（世界的な大流行）は、この先もしかしたら何十年も付き合わざるを得ない「日常風景」となるのかもしれない。一時期は、「コロナが終わったから何々がしたい」といった無邪気な声も聞かれましたが、「コロナありきの社会」へと制度設計や心構えを持ち直さなければならなくなりました。また、緊急事態宣言が発令され、感染者数や感染のリスクなど様々な医学的情報がメディアによって拡散されるなか、私たちは外出する際はマスクをする、他人との距離を保つ、帰宅したら手洗い

やうがいを徹底する、などの新たな生活習慣が身に付きつつあります。

また、コロナ禍は教育の世界にも深い爪痕を残しました。本学では今年はい入学式を行うことは出来ませんでした。卒業式も一部の学生しか参加できず、ご父兄の出席は叶いませんでした。例年は学位記授与式の後、臨床講堂前でクラブの後輩たちに見送られる卒業生たちの晴れやかな姿やご父兄と写真撮影する姿を見かけるのですが、今年はい三密を避ける意味で全て禁止とされました。新入生たちは新学期を迎えても大学のキャンパスに入校することすら出来ず、自宅待機を要請されています。新しい友人たちとの出会い、新たな大学生生活に心躍らせる日々がいつ訪れるかも分からない不安な状況が続いています。所謂、講義形式の授業は全てオ

発行 筑波大学白菊会
茨城県つくば市
天王台1-1-1
解剖献体事務室
電話 029(853)3230
印刷 前田印刷株式会社
電話 029(875)6696

字歴 題略 紙者 表筆

今井 凌雪（いまいりょうせつ）
調一 大正十一年十二月十九日生
立命館大学 卒
前筑波大学 教授（芸術専門学群）
日展評議員・日本書芸院常務理事・
雪心会主宰
朝日書道千人展メンバー・日展文部大臣賞・
朝日書道賞、芸術院賞受賞





筑波大学白菊会 第37回総会 令和元年10月9日

ンライン化され、教員も学生も慣れないシステムを駆使し、文字通り悪戦苦闘が続いています。首都圏から全国に広がった緊急事態宣言により人の移動や経済活動が極端に制限され、感染防御の観点から対面で食事することすら憚られる状況の中、教育の現場から実習や実験は一時的になくなりました。医学教育では、互いに体躯を提供し合って診察法を学んだり、ロールプレイを介して医療面接の技法を習得していた教育技法が崩壊しました。そうした逆



学長挨拶（慰霊式にて）

境の中、アイディアを駆使して教育の質をできるだけだけ保ち、何とか社会から許容される範囲で知識や技能の伝授・教授を可能にするよう、教員たちはオンライン授業の内容を工夫しています。普段使用することのなかったオンライン会議ソフトの使い方を急いで学び、少数の学生とのチュートリアル（少数の学生グループに対し一名の教員が付いて、ディスカッションを中心とした課題解決型の教育を行う）やクルズ（臨床教育の中で少数の学生を対象にした講義形式のもの）を行ったり、試問を行ったりしています。また、臨床の現場や手技中心の実習については新たに動画を撮影し学生に公開したり、YouTubeから目的に合った動画を探してきたりしています。試行錯誤を繰り返して、学生から教育効果のフィードバックを受ける中、新たな発見やこれまでの常識を見直させられることもしばしばです。はたして講義では、学生を一堂に会する必要性が本当にあるのか？むしろ、いつでも、何度でも、繰り返し視聴し受講できるオンライン講義の方が教育効果が高いのではない

か？などと自問自答しています。

では、解剖学の実習はどうでしょうか？近年、解剖学ソフトを駆使し、コンピュータ画面上三次元で人体構造が描出される優れた教材が開発され、効率よく解剖が学べるようになりました。私たちは解剖実習においてもオンライン化、遠隔教育を目指すべきなのでしょうか？私は四十年前に解剖学実習を行いました。それは六年間の医学教育の中で、文字通り最も鮮明な記憶として残っています。ご遺体に初めて接したときは締めつけられ、震えるような緊張感を覚えました。次第に、ご遺体に対する畏敬の念と医療従事者になるのだという自覚が少しずつ、確実に芽生えてきました。大学生から医学生へと心の変革を迎えました。全ての医学生が人として、医療従事者として成長し、文字通り一皮むけるのが肉眼解剖学実習です。大学教育でどれほどオンライン化が進もうとも、解剖実習の価値は時代を超えて不変です。筑波大学白菊会の皆様には、引き続き医学教育へのご理解とご支援を賜りたく、ご協力をお願い申し上げます。

追慕の辞

本日、ここに筑波大学篤志解剖体慰靈式が挙行されるにあたり、筑波大学白菊会会員を代表いたしましたして、謹んで「追慕の辞」を捧げます。

人生わずか五十年・六十年とも言われた時代から、長寿国日本に成長したのも、医学医療の進歩による医にかかわる研究努力の賜物と思います。第二第三の野口英世博士が、無医村や設備の乏しい場所で医療に活躍されて行く未来。学生にとって、大きな希望をいだき心技のための勉学の一步は解剖実習が責務と思います。献体と言えど若き学生の皆さんにとって、自身の目と手に触れる体験は筆舌に表せぬほどの心労とお察しします。

また、ご指導いただく、先生方の日々のご努力にも深く感謝と敬意を表します。

私達白菊会会員は献体登録者として人生最後に献体することで、医を学ぶ学生に少しでも役立つことが出来れば

と願っております。そして、この切なる思いが叶えられますよう、これからも日々の生活を慎んで過す所存です。

伝統ある筑波大学の医学医療に対しまして、皆さんと私達白菊会会員が献体することで良い絆として永久に継承されることができますよう祈りたいと思います。

終わりに臨みまして、ご遺族皆様、関係者の方々が正常解剖、病理解剖、法医解剖に対しまして深くご理解を示されたことに改めて敬意を表しますと共に、ご献体いただき御遺志を全うなされた方々および医学のために貢献された故人に感謝を捧げ、御冥福を心よりお祈り申し上げ、「追慕の辞」とさせていただきます。

令和元年十月九日

筑波大学白菊会会員代表

細矢通雄



追慕の辞

本日、筑波大学篤志解剖体慰霊式が挙行されるにあたり、解剖実習のために御献体くださいました方々に、医学群学生を代表して謹んで追悼の言葉を捧げます。

私たちは、御献体くださいました白菊会会員の皆様、並びにご遺族の方々のご厚意により、今年の五月末から六週間の解剖実習を行うことができました。

追慕の辞をこうして皆様の前で読む今、解剖実習が始まった時からおよそ四カ月近くが経っています。実習の初日、初めて御遺体を目にした時の今までの経験したことのない緊張感は今でも忘れられません。毎回実習の前後に黙祷が行われるたびに、身が引き締まる思いを感じ、それは実習を行って一カ月半途切れることはありませんでした。

解剖実習を通じ、私は医学類に入学して初めて、自分が医学の道に進んだ本当の意味を考えさせられました。そして、医師になるために特別に許された人体を解剖するという行為に、改め

て自分がこれから医師として背負う使命を感じ、また六週間という長い時間をかけて死と対面したことから、はじめて死とは何かを真剣に考えるきっかけが得られたように思います。

今回の実習を通して、模型やアトラスのような教材は人体の典型的な構造を示す「知識」に過ぎないんだと強く実感しました。私たちはその知識をたよりに、御献体くださった方々それぞれが持つ真実の人体を学ぶために、解剖実習を行ったのだと思います。そして、御献体くださった方が生前どのような方で、どんな人生を送ってこられたのか、またどのようなお気持ちで御献体をされたのかということについて思いを馳せながら実習を進めるうち、感謝の気持ち、自分の中に自然と生まれてきました。

白菊会の皆様の期待に沿えるよう、私は勉学に励み、人の気持ちを思いやり、他者の痛みを理解することのできる医師になるべく、医師としての心構えをつちかかっていきたいと思えます。

最後になりましたが、御献体いただきました方々のご冥福を心よりお祈り

申し上げますとともに、肉親の死に際し、悲しみや苦しみの中、御献体にご理解くださり、ご協力いただいたご遺族の皆様の計り知れないご厚意に改めて感謝申し上げます、追慕の辞とさせていただきます。

令和元年十月九日

医学群 医学類 二年

福井 篤



会員のみなきまからの便り

無題

大森重則

拝啓

もう一年が経つのかと思うと感慨深いものがあります。私は送っていたいた解剖学への招待は読みたいとは思いません。送ってほしくありません。

去年は、胃のピロリ菌内視鏡検査そして大腸がん検査と立て続けにしました。おかげ様で異常なしでした。今年も、前立腺肥大で検査をした結果、前立腺がんの疑いありと言われて、MRI検査を受けまして半年後のPSA測定(血液検査)を待たなくてはならないのです。前立腺がん経験者の友人の話では、数値的には心配ないだろうと言われたので、ちよつと安心しました。健康維持のためには、それも必然かと思いましたが。

去年は、JBLのスピーカーを買って、クラシック・ジャズを聞いて

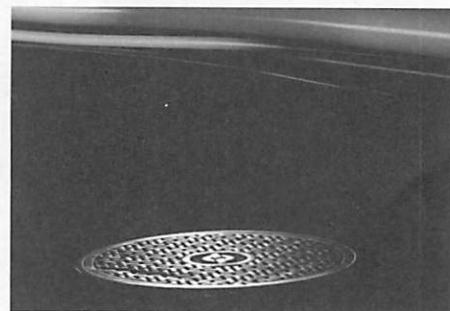
います。美術展も大好きで、美術館、画廊を歩き美術三昧の日々を送っています。

今年三月に行方に住む友人がくも膜下出血のため六十才で亡くなりました。とても親しい友人だったのでショックでした。岩手県の盛岡に住む弟さんからのデンワで知りました。孤独死だったようです。葬式には出席しませんでした。コロナが怖いからです。

楽しいこともあります。近所に住んでいらつしやる、書道家の川又南岳先生の家におじゃまして東京で買い求めた珍しい画集を持って行き、芸術談議をするのが楽しみです。茨大の教授をなさっている頃は、学生達が朝まで酒を飲んで大変だったようです。高い所に健康第一の書が飾ってあります。

とにかくお酒が大好きで楽しく笑ってよく喋る人です。珍しい画も沢山飾ってありたいくつしません。私の昔の写真もていねいに見て下さいます。モノクロ写真、カラー写真、四十年分の作品が沢山あるのでありますがたいです。私の作品も沢山たまりました。二十年前に入選した、マンホールの写真を同封

します。人を感動させる作品を作り続けたいと思います。



(光景)

数値と寿命

金原ヒ口

私には家族性高脂血症という病気がある。母が六十歳代に受けた、とある生命保険会社の血液検査結果を見た医師に「娘さんがいるなら調べさせてほしい」と言われた。妹と検査を受けると、私だけが高数値であった。地方住いで子育てに忙しかったので、その後の定期的検査を断った。

二十年ほど前、たまに胸に違和感を

覚えて地元の総合病院を受診し、狭心症で即刻手術すべし、と診断された。付添ってきた夫がセカンド・オピニオンを求めたい、と申し出た。細い糸を頼って東京の血管系大病院で、再度、全ての検査をやり直した結果、心臓の入口の詰っているように写っている箇所は、生れつき細い血管にカテーテルが勢いよくつつこみ縮んでしまったもの、と解った。

この病院から高脂血症の治験患者になつてほしい、と頼まれた。自分の状態もハッキリして、時間の余裕もあり、東京行きは楽しく、娘の居る実家の様子を見がてら、一年に四回ほど通院していた。数年経ち、最寄り駅から七分くらいのわずかに傾斜のついた実家への道が、足に重く感ぜられるようになった。

病院ではその頃、心臓の雑音がひどくなっている、と大動脈弁置換を勧められていた。

十年前の夏の暑い日、スーパーで車から降りた時、強い目眩がした。これは心臓が相当に悪く、悲鳴を上げていると感じた。

翌年の一月に四時間の手術で新しい生体弁が入った。手術の次の朝、枕元で執刀医が「これでラクになりますよ。先天的に変形のあった弁にコレステロールが硬く付着していました」と嬉しそうに言ったが、胸骨をノコギリで開かれた痛みが強く、私は嬉しさからはほど遠かった。

しかし二カ月後の大震災の大混乱を乗り越えた。かかりつけ医は血液検査の赤い数値はあなたには異常値ではない、と言ってくれる。母は自分の弁で八十九歳まで生きた。生体弁の私が献体できるのはいつ?と思っている。

私の献体

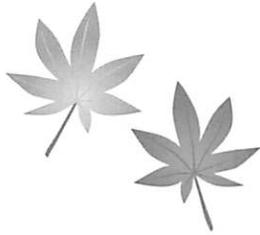
河野 トシ子

献体をしてから三十年やつとペンを取りました。昭和六十年九月一日、主人六十四才で天理の憩の家で命をお返ししました。そこで献体を知り、申込もうとしたら各県の大学でと言われ、茨城にもどりすぐにはできませんで、

登録通知が届いたのが平成三年二月二十日。私の生まれたのが昭和三年二月二十日。令和まで生かされてる私も。もしかして令和三年二月二十日まで生きさせてもらえるの? 神のみ知る由もありませんが過ぎ去った九十二年を振り返り、農家に嫁ぐのがいやでミシンの仕事がやりたく知人を頼って上京七年後、奥さんに亡くなられ、女の子を抱いて困ってる方以後添えにとの話に、戦中パイロットで空から郷土訪問された方で、あこがれの人だったので帰郷し結婚し、戦後まだ大変な頃でしたが協力して縫製工場を作り、従業員も三十人近くなった頃、娘婿の会社倒産。家で働く事になり、すべて安定した頃に主人の癌がみつかり、獨協で手術して頂くも手おくれだそうで、三年後に再入院の話に獨協に行きたくないと感じ落ち込む主人に、神様にお参りしてから決めましようとの私の参拝してる天理にさそい、大きな病院を見て、見るだけ看てもらおうと診察を受けたのが院長先生で、お互いに戦地へ行った事で話が盛り上がり天理が気に入り、後日お願いして入院させて頂き、皆様に手厚

い看護を受け、命は返しても新しいからだを神様からお借りして、またこの世に出直してくるといふ教えを受けて、心安らかに旅立てたと思つてます。

その後、娘婿にまかせた会社も平成十五年十月、娘が五十三才で脳こうそくで倒れ、続いて会社も倒産、娘婿は糖尿悪化で三年後亡くなり、車椅子の娘と十八年暮らし、昨年五月苦しみもなく七十才で逝き、ひとりになりましたが私の生んだ息子は大学を終え、千葉に住み娘は東京の洋裁学校を出て横浜に居り、孫達にもみんなに支えられありがたい毎日です。今もミシンでマスクなど縫って、皆様によるこぼれていて、最期に学生さんにお役に立たせて頂けるのを心のはげみからだの動ける事があります。

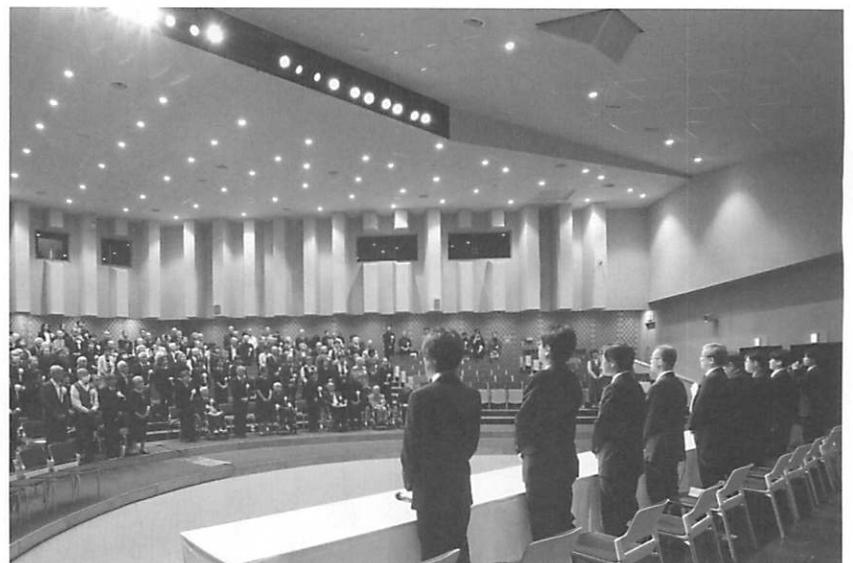


今ここに

佐藤 怜子

誰が予測しただろうか。世界の感染者は八月十二日の時点に於いて、七十三万人を超えた。瞬く間に世界中を席捲した新型コロナの脅威は、人々の頭上に巨大なマントを広げながら、今なお、恐怖心を掻き立てている。今後、更なる犠牲者が増加することなく、一日も早い、終息の日の訪れることを祈るばかりである。

時折り、陽炎のようにふっと浮かぶ言葉がある。胸の奥深いところに座を占めている言葉がある。その言葉は空气中を浮遊し、姿を見せたり隠れたりしつつ、私が呼吸を整え立ち止まることを待っている。深い意味を持つラテン語の「メメント・モリ」(死を忘れるなかれ)／自然豊かなタヒチを描いたポール・ゴーギャンの「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」これらの言葉は、長い年月を経た苔むす寺院のように深淵な



る言葉である。人の生と死が表裏一体となり、どのように生を思い、どのように死を考えるのか、それは各個人の裁量に委ねられるものではあるが、人生の折々に出会った大切な一滴となり、静謐ななかにも毅然とした孤高の言葉ともなった。何時頃からか、私が私であることを深く思索するようになったのか。与えられた時間の中で、見えな

い糸を手繰り寄せるように、「私は私でありたい」何故か、深く問い続けることが私そのものとなっていった。思い起こせば、白菊会との邂逅から三十四年が巡り、緩やかな流れながら、今ここに明確な座標が示され、私が私の全てを包み抱きしめている。

無題

高橋 利子

去年の春、天国へと旅出った父、遺言通り美女軍団のお弟子さん（腹話術）達とのカラオケ記念会。ボランティア仲間達との語らい。そこには、いつも通り、みんなを笑顔で見守る父であり、師匠であるじいちゃんがいるようでした。仲間達もそう感じているようでした。まだ献体というボランティアから帰宅するのを、美女軍団やボランティア仲間達が、首を長くして待っています。そしたら又、先生、いやじいちゃんといっしょにカラオケ会をして楽しく祝いましょうと話しています。

私は三十代で会員になりました。いろいろな所で献体の話を楽しくおもしろく、まじめにお人形めぐちゃんと話してきました。しかし、家族にはほとんど話しませんでした。

お弟子さんやボランティア仲間達のようにすを見てきた夫が、昨年秋から会員になりました。

「じいちゃんみたいがいい」

献体できる悦び

田中 秀明

私は今年八十歳になりましたが殆ど病気せず、五十年以上昔にした虫垂炎の手術以外、手術歴もありません。できるだけ自然に即して生きて、人の役に立ちたいと思つて生活しています。

臓器提供を考えている人もいるようですが、高齢者の臓器はポンコツ自動車ですからどうかと思つていたところ献体の話を知りました。

筑波大学の白菊会に資料を請求したところ、必要な書類と共に「筑波しら

ぎく三十七号」を送ってきました。そして解剖学の実習を終えた医学生さんの真摯な感想文を読んで「これだ！」と安心しました。

大阪にいる十人近くの兄弟姉妹の同意書をとるのに、判を押してなかったり、住所が抜けていたり、コロナで大阪に行けず郵便で往復してやっと必要な書類が整いました。そして筑波大学白菊会事務局から会員証が送られてきて妻と共にほっとしました。交通事故などで身体に損傷すると献体できないので注意しようと思えます。

生きると云うこと

平 石 賀須子

一日の速さは年を重ねる毎に感じる事だが一年もあつと云う間です。七月初旬筑波大白菊会さんから「解剖学への招待」の文集と例年の「筑波しらぎく」の書面の要請、私も書ける内は頑張る積りでいましたが矢張り題名でいつも悩んで来て現在の私に取って此れ

しか無いと思います。山河越えて何とか九十五歳に辿り着き、ペンを持って書ける事は生きているからであって生きる事と云う事の重さを感じます。私の今の体調は八十%は没^{ぼつ}で二十%をいつ迄維持出来るか今は気力との闘いです。二十歳迄色々な国との戦争を経験し平和な時代を味わっていたにも拘わらず今年の春「新型コロナウイルス」と云う集団感染、私は勝手にコロナ戦争と名付けましたが多くの犠牲者を出しているのだから当たり前だと思う。長生きも良い事許^{ばか}りでは無い事を実感している次第です。私は今は買物にも行けない状態ですが、右手だけは何とかペンが持てるので今は趣味で認知症予防の為色々な分野に新聞投稿しています。最近投稿者が多く掲載は叶いませんが毎朝、新聞を見るのが楽しみです。左手は震えています。今年も何とか「私の生きる」と云うこと」の題名伝わったでしょうか？来年書けるかどうか分かりません。神様仏様どうぞ書かせて下さい。結局神頼みでした。(笑)

解剖実習を終えて

今井勇輝

実習が始まる初日、これから人体の構造を学ぶことができるという期待と、実際のご遺体を解剖させていただくという不安で胸がいっぱいであった。いざ解剖が始まり、ご遺体の皮剥から皮神経、皮静脈など確認していくにつれて、その不安というものは消え、人体の不思議に心を踊らせながら解剖を進めていった。はじめの方は実習書をよく読んで、教科書などを参照しながら進めていけば理解することが容易であったが、解剖が進むにつれて、一つの血管、神経、臓器に多型性に富んでおり、どれ一つとっても教科書通りの器官はなく、予習してきたものが実習に生かされるようなことが少なくなっていた。そうして解剖に苦戦する日々が続く中、大学院生の方が「細かいところも大事だけれども、臓器を理解する上で、思考の軸になる基本的な部分を理解することが大事だよ」とおしゃっ

ていたのを今でも鮮明に覚えている。実際、それから予習の仕方を変えると人体の構造を俯瞰的に見ることができるようになっていった。ただ、全てがうまくいったわけではなく、目的の臓器を見つめることができなかったり、その臓器の役割を教科書的には理解することができても、実習室ではその形状と構造物から一致させることができないことも多くあり、苛立ちが溜まっていく日もあった。今、実習が終わってみると、全日程を走り抜けることができたという達成感と、途中投げ出しの状態になってしまった自分に対して、反省の念を抱かざるをえなかった。最後の先生達のお言葉の中で、「ご遺族は献体することがどれほど覚悟を必要とするものなのか」ということを話していただき、解剖が始まってから終わるまで、しっかりと感謝の念を持ちながら進めることができたのかと自分に問いかけたが、素直に頷けることはできなかった。解剖が終わわり、帰宅したとき、ふと涙がこぼれた。人体の不思議に触れさせていただいた感謝を医者になつたあとも持ち続けて、多くの患者さん

の命を救えるように日々勉強に邁進していくことが、今回献体していただいたご遺体の供養につながると思う。そして、私たちが気持ちよく解剖実習を行えることができたのは、毎日実習室を清掃していただいたり、その日必要な解剖の道具を揃えてくださった方々のおかげであることも忘れてはいけない。このように知らないところで私たちを支えてくださっている人たちにも感謝しながら、これからも医学生として頑張っていきたいと思う。

大越 萌子

二年次春学期の授業で、消化器外科の先生が「手術を円滑に進めるには手の器用さよりも解剖学的な知識の方が圧倒的に重要」と言っていたことがあります。その時の私は体の中を実際に見たことがなく、解剖学の難しさも体感していなかったため、半信半疑でその話を聞いていました。解剖実習を終えた今はその先生が言おうとしていたことがある程度想像できるよう

な気がします。

私たちがご献体としてお世話になった方は八十六歳の時に老衰で亡くなった女性で、背中には褥瘡の跡がたくさんあり、亡くなる前はほとんど寝たきりで過ごしていたことが想像されました。筋肉をはじめあらゆる構造がもろくなってしまっていたため、実習書の指示に従って筋肉や血管を切断しようとしても、どれが切断すべきものかどうかが残すべきものなのか、判別することがとても困難でした。まさに、手を使った作業に入る以前に、目の前の構造を解剖学的に理解する段階でつまづいてしまっていたのです。このままではいけないと思い、図譜と実際の体の様子が違うと感じた時には他のご遺体を見せてもらってより詳しいイメージを得たり、正常とのずれである変異のパターンについて事前に調べたりしてから実習に臨むようにしました。こうすることにより構造についての理解が深まり、何を基準に見るべきものを探せばよいか明瞭になるため、実習中に筋肉や血管を判別するのが前よりも容易にできるようになったのです。解

剖学的な知識があれば人体の見方も出作業に有利な方に変わっていくのだなど感じることも多々ありました。

とはいえ、生命維持に重要で構造も複雑になる首や上半身の深部に入ると、いくら知識を得て班員と協力しながら実習を進めても実習書通りにはうまくいかないことばかりで、この方は全体



的に構造がもろいから、と諦めてしまつたことも何度もありました。実習が終わった時は、全身について勉強することが出来たという達成感ももちろんありましたが、ご献体いただいた方、そのご遺族の方が望んだような学習を自分たちは出来たのだろうか、という罪悪感の方が大きかったような気がします。解剖実習で解剖させていただく方は私たちにとつての最初の患者さんである、とよく言われますが、将来医療の現場で患者さんの体内を診るときには、ご高齢で身体機能が衰えてしまつていてもそれを理由に構造の判別を諦めてしまうことは決してできません。解剖学的知識がいかにも、実際の体内を診るときの自分の助けになるか、今回の実習で感じたことを心に留めながら、次の患者さんを診るときまでにさらに知識を深めていきたいです。

荻野 遥

解剖実習の最後の日、私たちはご遺体をお棺に納めた。六週間にわたってお世話になったご遺体。お棺の中の姿を見たり、花を添えたりして、この方が亡くなったときのことを考えた。この方に家族がいるのかな、どんな人生を送られていたのかなと改めて考えることとなった。私がそのようなことを考えていた時、先生が学生全体へと声をかけた。「この方々はお葬式の途中で大学に来てくださっている」との発言であった。力強く熱い声で語られたその言葉は、深く感じられた。私は、本当にその通りだと思った。この日以前にも、ご献体された方々はお葬式を終えたのだろうか、まだお体はここにありますがどうしているのだろうかと考えたことはあったが、途中、という表現が印象的であった。そんな大切な時期に我々のもとにお体をお貸しくださっていたと思うと、本当にありがたいことである。

解剖実習は、医学生としてやらなければならぬものであり、覚えること



や勉強することが多く体力的にも大変で、実習の最中は、正直、つらいと思うこともあった。しかし、一人の方のご遺体と向き合つてずっとその方について学んでいったこと、職員とともに実習を行ったことはとても大切な体験になった。私たちは医学生ではあるがまだ二年生で、実際の患者さんを診察

するような経験はしたことが無い。ご献体者は、初めての患者さんともいえるものであった。そして、他の動物ではなく人に向き合ったことで、私たちは医師になるのだと再認識することになった。

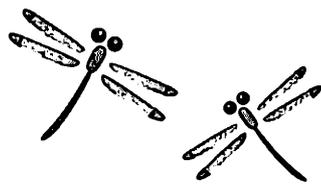
私は毎回実習はじめと終わりの黙祷で、ご献体くださった方への感謝を心の中で述べるようにしていた。「今日もよろしくお願いします」や、「ありがとうございます」に始まり、その日の進み具合や学んだことを述べるのである。始まりの黙祷の号令を自分が担当したときも、頭の中で余裕をもって感謝の気持ちを述べる時間を設けることを意識して行った。ご献体者を解剖するのはもちろん私たちの手なのだが、体の様子を見せてくれるのはご献体者で、先生のような存在であった。正常な構造はもちろんのこと、教科書通りとは限らない人体の構造や個人差について、文字通り身をもって教えてくださったのは、ご献体者であった。机上で考えているだけではわからないことをたくさん学ばせていただいた。

ご献体者は、私たちにとって、患者

さんでもあり先生でもある、そのような存在であった。

実際の臨床についてはこれから学ぶが、この解剖学で学んだことがとても重要な基礎となることは間違いがない。今年も、新型コロナウイルスの流行により解剖実習を行う時期が遅くなってしまう。その影響で先に消化器系について学んだが、基盤が足りないと感じた部分があり、一方で、解剖実習の際に消化器の理解がしやすいとも感じた。解剖学と臨床は強く結びついているのだとしっかり認識したうえで、これから学んでいきたい。

そしてこの解剖実習の記憶を大切にしながら、医師として働きたい。



人間の体を解剖することは一般的に常識を超えるものとみなされる。よって、どんな理由があっても、解剖する以上それに伴う責任感を痛感しなければならぬ。私は解剖実習でこのよう、知識それ以上のものをご献体された皆様から教えてもらったと思う。

実習が進むほど、私たちの感覚は少しずつ鈍感になっていき、実習が終わるころには、実習第一日目ご遺体から白い布を取るときの緊張、解剖を始めるとき解剖器具を持った手の震えなど、最初の衝撃はほぼ消えていた。実習を終えて納棺を行いながら、ご献体された方が生前お使いになっていたもの、帽子や時計などの日常用品を見たとき、またそれをご遺体とともに納棺するとき、私は自分がこの六週間やっていた実習の重さを今更のように実感した。その衝撃は実習第一日目のそれより大きかった。納棺式の最後に行われたご献体された方々に対する一分間の黙祷を、私は実習を行った六週間よりも長く感じた。

医師は人にたいして、敬意と尊敬をもって行動をしなければならぬ。ご献体者にも例外はない。いつも頭に入っていた考えではあるが、実際に解剖実習を行いながら体感することでの意味が一層深く心に刻まれた。

コロナウイルスの流行のせいで慰霊祭がなくなってしまったが、私を含め筑波大学の医学生たちはご献体された皆様やご遺族の皆様に一生をかけても返せない恩を被ったことであり、感謝の気持ちを持っていく。この実習で医学生たちが得たことは解剖学的知識だけではなく、未来の医師養成のためにご献体された方の遺志を継がなければならぬという責任である。忘れてはいけないことは医学的知識よりも、なぜ医学を勉強しているのか、またなぜ医学を勉強することができているのかの方である。後者を忘れた時点でどのくらい優れた知識を覚えても、それは正しく使われないことに決まっているので、その存在価値はないともいえる。

まだ私は二年生であり、医師になることは遥かに遠く感じている。だが、この六週間の経験を無駄にしないため

には、私は医師にならざるを得ない。これは私個人だけの問題ではないといふことが分かったからである。社会から医師として貢献してほしいと期待されていることが分かった以上、その約束を守りたい。

酒井直希

初めにご献体いただいた方とそのご遺族に感謝の言葉を述べたい。人にとって今後訪れる自らの最期と向き合うことは大変悩ましいものである。生前から考えをめぐらせ、献体という道を選ぶのはさらに難しいことだ。私たち学生と六週間の間向き合ってくださいました。ご献体いただいた方々に深く感謝したい。私は近い間柄の人を亡くした経験はまだないが、大切に思う人が心に深く傷を負った姿は目の当たりにしたことがある。傷ついてきた当人はもちろん私自身も言葉に表すことのできない深い悲しみにくれたことを今でも鮮明に覚えている。物理的、心理的、どんな形であれ大切な人が傷つくことは、

そばにいる人も大変心を痛めるものだ。そして寄り添う距離が近ければ近いほど痛みは大きくなってしまふ。献体には医学の発展という目的があるが、解剖することは決して好まれることではない。大義名分があるがためにさらに複雑な葛藤が生まれてしまふ。ご遺族の方々がこのような葛藤を抱えているであろうことは想像に難くない。その葛藤と向き合い、ご協力してくださいましたことに心から感謝したい。

恥ずべきことだが、解剖実習の貴重さと重要さを実習前には十分に理解できていなかった。軽んじていたわけではないものの、実習の前と後では比較できないほどの差があると感じている。実習に臨む前は人体のつくりを「見る」つもりでいた。だが実際に解剖を行うっていくうちに目にした構造を頭へ「刻み込む」ようになった。今後向き合っていく人体について、ここまで深く学び理解する機会は今しかないことに気づいたからである。「百聞は一見に如かず」ということわざがあるが、まさにその通りで自分の目で確認したところは、鮮明な実習の記憶とともにその構

造を理解することができた。人の構造を「見る」ことは資料等で行えるが、解剖では理解し頭に「刻み込む」ことができる。その点において紙やPC画面では代用ができない。解剖実習は替えがきかないのだ。先生方がおっしゃっていた「解剖実習をもう一度行いたいと思うようになる」という言葉が身に染みてわかった。解剖実習では知識だけでなく、医師を志す者としての自覚を持つこともできた。緊張感の中、四人で同じ目標をもって六週間を過ごすことは、学生の間にはめつたに経験できることではない。また、お互いが割出した部分などの意見交換を毎日行った。ここでは各々の剖出の責任、それを班員で共有することの責任、この二つを経験することができた。これらは医師として現場に出れば当然のことである。それぞれの役割を全うしその内容を他の医療従事者へ伝達する。これができるなければ、患者を支えることはできるはずがない。学生の間はこのような経験できたことは、医師としての心構えの柱となると感じた。

実習後、班員とともに慰霊塔を訪れ

た。そこには「医学徒にはげましと大きな期待を寄せて」と刻まれていた。感謝の気持ちが溢れると同時に、そのはげましにどれだけ報いることができているのか、その期待にどれだけ応えることができるのか、不安も募った。その不安が杞憂であったと言えるほどの十二分な恩返しをするためにも、今までの以上の努力を積み重ねていかなければならないと改めて覚悟をした。

最後に、実習の準備や指導をしてくださった先生方、ご献体いただいた方々、そのご遺族の方々、今回の解剖実習に関わったすべての方々に、改めて深く感謝申し上げます。

阪 中 優太郎

解剖実習が始まるまで、僕はなぜ六週間という長い期間をかけて毎日毎日実習をしなくてはならないのかわからなかった。自分で観察して分かることよりもよっぽど詳細に描かれた人体の図表があるし、人体の詳しい3Dモデルを自由に動かすことのできるソフト

もある。それを見ながら、実習の手引書に沿って、オンラインで解剖実習をすればいいじゃないかと思っていた。しかし、実際に実習が始まってから、その考えがいかに的外れであったかを実感した。

まず、「医学とは人を診る実学である。教科書や図表で理論的な知識を身につけた上で、実際に自分の目でその構造を見ることで初めてわかることがたくさんあった。点として得た知識が、実習中に線として繋がり、やがて自分の頭の中で地図として形作られていく感覚があった。実際の人体は、わかりやすく描かれた人体の図表とは異なっていて、何がどこにあるのかとてもわかりづらい。パツと見ただけでは、それが正常な構造なのか、異常な構造なのかも全くわからなかった。しかし、医者となり患者を診る時には、そのわかりづらい人体と向き合い、異常を発見しなければならぬのである。だからこそ、実際の人体をしっかりと観察して、自分の中に正常な人体構造の地図を作成することは、医師となる上での絶対条件である。だからこそ、この解剖実

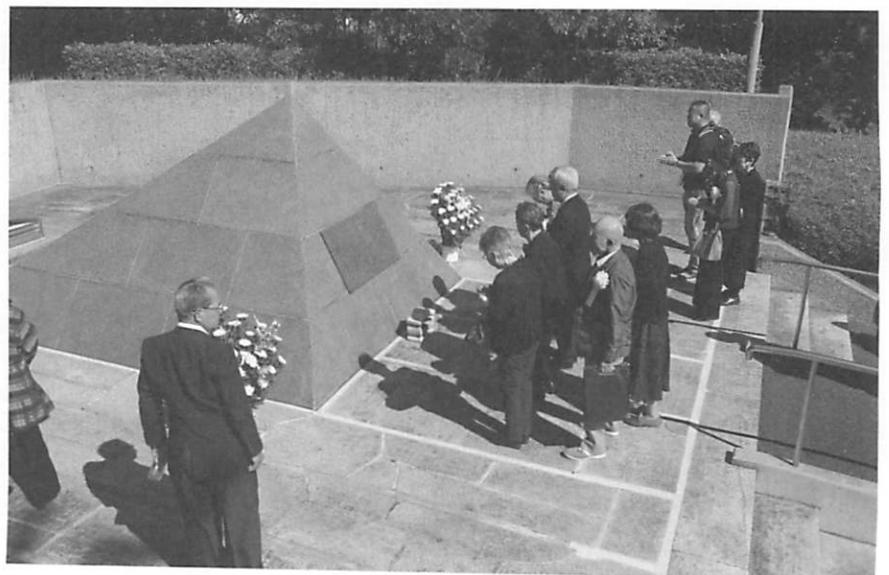
習を通して人体の構造に対する知識を深めたことが本当に重要なことであつたのだと思う。

また、この実習でご遺体を実際に解剖することを通して、死というものについての考えを深めることができたと思う。今年の夏に、身内の葬式に参列した。その時に、なんだか遠い存在のように感じていた人間の死に人生で初めて対面した。しかし、正直なことを言うと、悲しみや虚しさが先行してしまい、それがどういふものであるのかをあまり実感することはなかった。今回の実習では、人生で二度目の死に対面することになった。解剖実習が終わつてご遺体を棺に納めるときに、本来ならば生前のままのお姿で葬式ができたはずだったのだなと改めて感じた。だからこそ、筑波大学の医学生のためにお身体を提供してくださったことに対し、ご本人やご遺族の方々の崇高な意志を感じて、感謝と畏敬の思いで一杯になった。また、医学という学問が、このような本当に崇高な意志やたくさんの人たちの努力によって進歩してきたという事実が、自分自身に重くのし

かかってきた。僕たちはその意志と努力をしっかりと受け継いで、医師として少しでも多くの人の命を救わなければならぬということを実感した。今回解剖させていただいた方の意志と想いを決して忘れずに、未来へと受け継いでいくことこそが、自分にできる一番の感謝の示し方なのではないかと感じる。解剖実習を終えて、やっと医学生としての自覚がしっかりと芽生え、スタートラインに立つことができたように感じる。

櫻井晶子

先日、六週間にわたる解剖実習を終えた。今年度は新型コロナウイルスの影響で当初予定されていた時期から四ヵ月ほど延期された。他の大学では対面での解剖実習は中止になりバーチャルで代替されたところもあったよ。うなので、対面で行うことができたのは非常にありがたかった。この目で見た、自分たちの手で割出した構造は何よりも強く印象に残っている。他の科



目の勉強においてもテキストや参考書を見るだけよりも絵を描いた方がよく理解できる。しかし実物を自分の手で出していくというのは、その比ではなかった。予習をして、その通りになつているところもあれば全く異なる部分も多い。全体として、教科書に載っていることをただ正確に覚えるというこ

とではなく、正常と言われる状態の、3Dでの構造を把握し、文章を見たときに自分の頭の中でイメージできるようになるということが一番の目的であり、大事なことなのだろうと感じた。そして試験勉強の際にもこの重要性を感じた。実際に手を動かして見ている分理解のでき方が違う。さらにただ覚えていくだけでなく、立体的な構造や機能を考えた上で「この部分はなぜこのような構造になっているのか」「どんなはたらきをしているのか」などについて考えながら深く学んでいくことができた。これは実習がある科目ならではのであり、今後学ぶ科目においても今回の経験が活かされるであろうから、本当に貴重な経験ができた。この状況下で解剖実習を行う判断をして下さり、無事に終えさせてくださった先生方に感謝を伝えたい。

解剖実習中の精神面については、想像以上に厳しいものだった。先輩から話を聞く中で、ある程度の覚悟はしていたつもりだった。しかし実際にご遺体を前にし、人間の身体を解剖することにとつともない罪悪感や恐ろしさの

ようなものを感じてしまった。自分が人間でなくなるような気さえしてしまった。ご本人やご遺族の方はつらい気持ちにならないわけはなく、その思いを抑えてまで医学の発展のために、とご厚意でご献体してくださっている。だからこそ、実習をさせていただく側の自分がこのような感情を持つことは失礼にあたるのではないかと悩んだ。深い感謝を持って、誠実に向き合うべきであって、罪悪感に苛まれてるのは違うのではないかと思った。しかし耐えられない部分もあり、実習期間中は食事がろくに取れず、色々と考えてしまい寝付けず、睡眠もなかなか取れなかった。それでも実習が進むにつれ、やるべき工程や学ぶべき事項が増えるにつれそれらに集中していくことができた。血管や神経の走行や筋のつき方など、なるほどこのようになっていくのか、おもしろいな、と思うことができるようになっていった。班員も私の心情をわかった上で、実習の手技面だけでなく精神面でもたくさん助けてくれ、感謝が尽きない。チームとして動くということの意味や大切さも学べた

ように思う。それらも含め、本当にたくさんのごことを学ばせていただいた。実習が全て終わり、納棺した日には、ずっと見させていただいていた、ご献体してくださった方に対する感謝の気持ちや心の底から溢れた。初めの頃に感じた恐怖のような感情はもう無く、罪悪感こそまだ残っていたものの、何よりも感謝の気持ちが大きかった。

この経験もこの感謝の思いも、そしておそらくこの罪悪感も、すべて「人の命」というものの重さや尊重の気持ちにつながっていると思う。今後もずっと忘れずにいたいと強く思う。そして人々の身体と心を救う助けとなれるような人間に、医師になりたい。



潮平 知之槇

八月二十八日～十月八日の約六週間に及んだ解剖実習が終了した。今年は新型コロナウイルスの影響で変則的な日程になったが、しっかりと実習をやりきることができた。本レポートでは、解剖実習を通して私が学んだことや強く印象に残ったこと、および実習を進めていく中で考えたことについて実習をやる前とやった後での心境の変化もふまえながら記していきたい。

まず、解剖実習が始まる前のことを思い返すと、私はかなり緊張していたと思う。ちょうど一年前くらいから医学の専門的な授業は始まっていたが、それはあくまで座学であり、机の上の知識としてしか人体について知らなかった。だが、今回の解剖実習では実際にご献体者の体に触れることで学ばせていただくわけであり、そのことが私をとて緊張させていたのだと思う。また、緊張していたと同時に最初で最後かもしれない経験ということもあって楽しみでもあった。

そしていざ実習が始まると、予想通

り、最初の方はものすごく緊張した。加えて、実習室は非常に蒸し暑くて苦しかったのを覚えている。だが、実習自体は毎日新しい部位について観察ができ、この目で見てこの手で触れて感じたことが自分の糧となり、想像ではない、リアルなイメージを形作って自分の知識そのものとなっていく感覚が非常に楽しかった。また、実習をしていく中で強く感じたのは、ご献体者の体は必ずしも教科書通りではないということだった。前日に予習をして行っても実際にその構造を見てみると、若干岐する箇所が異なっていたり、自分が想像していたものと違う質感、大きさ、重さだったりしてそれが非常に印象的だった。また、初めてみる関節や臓器の実物に驚くとともに感動することが多かった。

だが、この解剖実習をする中で最も強く思ったことは、実習を通して学べば学ぶほど実感したことでもあるのだが、私がこうして人体について深く学ぶことができてきているのは、ご遺体を提供してくださった方がいるからなのだということだ。私たちは、会員の方が

お亡くなりになられた後、解剖をさせていたでいてる。ご献体されなければ傷つくことのなかったお体であったのに。もし仮に私が高齢となったとして、同じような選択ができるかと考えた時に、きつとご献体いただいた方はどの方も、私たち医学生が立派な医師になれるようにとの願いを込めて決断を下してくださいましたのだらうと思った。そして私たちはそれに感謝するとともに責任を持ってしっかりと学習しなければならぬのだとも強く思った。

最後になるが、今回の解剖実習は私にとつて間違いなく一生忘れることのない経験になったし、これからの学びの一番の基礎になると確信している。今のこの気持ちを忘れることなく、より一層気を引き締めて今後の学習に取り組んでいきたい。



玉城 泰斗

私は解剖実習が始まるまで自分で参考書を読んで解剖学を予習していたのだが、参考書やインターネットの画像だけではあまり理解できない部分が多く、実際に自分の目で見たいという気持ちで募っていただけに、まずはこの状況下で解剖実習に参加できたことに感謝したい。

六週間の解剖実習の間、もちろん医学に関する知識が増えたことは言うまでもないが、何よりも気持ちの面での変化が大きかったように思える。実習初日、解剖室に入室すると多くのご遺体が解剖台に並べられた光景を見て、医師という命に直接関わる仕事の責任の重さを非常に強く実感した。あの時感じた緊張感や不安はうまく言い表せないが、医学を学んでいくことに対する覚悟を決めたような思いだった。恐らくこの日のことは医師として働き始めても忘れないと思う。この実習が始まる前までは、この辛い期間をどう乗り切ろうかということばかり考えていたが、いざ実習が始まると、前日の予

習で教科書に載っていた筋肉や神経、臓器などを実際に自分の目で見る事ができることの喜びから、毎日の勉強がそれほど苦に感じなかった。これまで約一年医学の講義を受けたが、これほど知識を吸収できるような機会は無かったと思う。

今回の実習で感じたこととして、教科書やアトラスなどの参考書に載っている解説と、実際の人体では、食い違っていることが少なくないということがある。私の班で解剖させていただいたご遺体だけでも変異が数カ所あった。ある先生が「全ての細胞が何かしらの血管に栄養されている。教科書やアトラスにはその中で最も多い例が載っているだけで、血管の分岐の仕方が違っててもどこかで補えれば何の問題も無く、そういうことは実際に解剖してみないとわからない。すべての構造がアトラス通りの人は一人もない」とおっしゃっていて、まさにその通りだと思っただ。基礎としての座学は大切だが、それが全ての人間に当てはまるものではないので、実際に人体の構造を自分で見ることができるとこの実習は非常に貴

重な時間だと思った。また、この考え方は臨床の現場でも大切だと思った。患者さんの病気を一般的な条件だけで考えるのではなく、例えばその人の生活習慣などの要因も考慮することなどで似た考え方を感じた。

今後学んでいく臨床の分野では、病気について、すなわち身体の異常について焦点を当てていくことになる。「異常を知るためには正常を知れ」これも同じ先生の言葉で、医師が患者さんの身体の異常を調べることができるとは、正常な状態を知っているからという意味である。今回の解剖実習を以て人体の正常な状態を学んだが、これを深く理解することが臨床の分野に活かさることで、地道な努力を続けたいと思う。

この解剖実習は、私が医師になるために進む道をはっきりと示したような、非常に充実した、濃い六週間だったと思う。このような重要な経験をすることができたのも、ご献体いただいた方々のおかげだということ深く心に留めて、それを糧に精進していくことを誓いたい。ご献体いただいた方のご遺族の皆様、本当にありがとうございます

た。そして新型コロナウイルスが流行する大変な状況にも関わらず解剖実習を実施していただいた筑波大学、実習中指導してくださった先生方、ありがとうございました。

寺 島 昂 誼

全世界で新型コロナウイルス感染症が拡大している中、六週間にわたる解剖実習を無事に終わることができた。当初は日本国内や茨城県内の感染状況が悪く、大学への入構が禁止になったり授業もすべてオンライン化になったりして実習を行うことが厳しい状況であった。

正直、解剖実習を行う前までは解剖実習を行う部屋に一学年全員が集まることは新型コロナウイルス感染者のクラスターを発生させるリスクを上げることになり、更なる流行拡大につながりかねないと思いオンラインでの学習だけで十分だと思っていた。実際に解剖実習は行わず、すべてオンラインで解剖学を学ぶことにした大学もある。

その一方で、筑波大学は先生方や関係者の方々のご尽力によりフェイスシールドやマスク着用、入室時の体温検査など厳重な感染対策の下で解剖実習を行った。六週間の実習を終えた今、改めて思い返してみると対面での解剖実習を行うことができて本当に良かったと思う。まずはこのような状況でも解剖実習を行うことを可能にしてください。関係者の皆様に多大なる感謝を申し上げたい。なぜこのように思うのかというと、オンラインでの勉強では学べなかったことが非常に多くあったからだ。その中で重要だと考える体験的学習と道徳的学習について述べていこうと思う。

まず、体験的学習はオンラインでは絶対に学ぶことができないものだ。具体的には、実際に解剖して三次元での位置関係の把握や神経支配の複雑さの視覚的理解が挙げられる。特に個体差について。座学では解剖図に基づいて学習しているが、その解剖図に載っているのはあくまでもイデア（理想的な形）であり、その解剖図通りの身体を持つている人は誰もいない。無論、個

体差があるということはオンラインでも知ることができ、それがどのようにイデアと違うかということは実際に目に入れないと分からないだろう。

次に、道徳的学習について。自分たちは当たり前のように「生」の世界で生きているが、この解剖実習では「死」を感じた。特に初めてご遺体のお顔を覆っている白い布を取ってお顔を拝見したとき、そして冷たい肌に触れたときに感じた。「死」は医師という職業柄、ずっと付き合っていかなければならないものであり、自分の目指す職業の責任の大きさも感じた。

これらのことは実際に解剖実習を行わないと分かり得ないことである。

最後に、この解剖実習はご遺体を提供してくださるご本人様とそこにご遺族の方々のご協力があった初めて成り立つものであるため、多大なる感謝の念を示し申し上げたい。我々医学生にご遺体を託して、学びの場を設けていただき誠にありがとうございました。この解剖実習で感じたことを忘れずに社会へ恩返しができるような医師になれるよう頑張ります。

森口裕之

約六週間の解剖実習を終えて一週間が経ちました。今でも、毎日の大学からの帰り道、畑の中の暗い道を歩きながら思い出しているのは、解剖実習で触れさせていただいたさまざまな器官の立体的な姿かたちや、その体内でのつながりの様子、触れた時の感触などです。

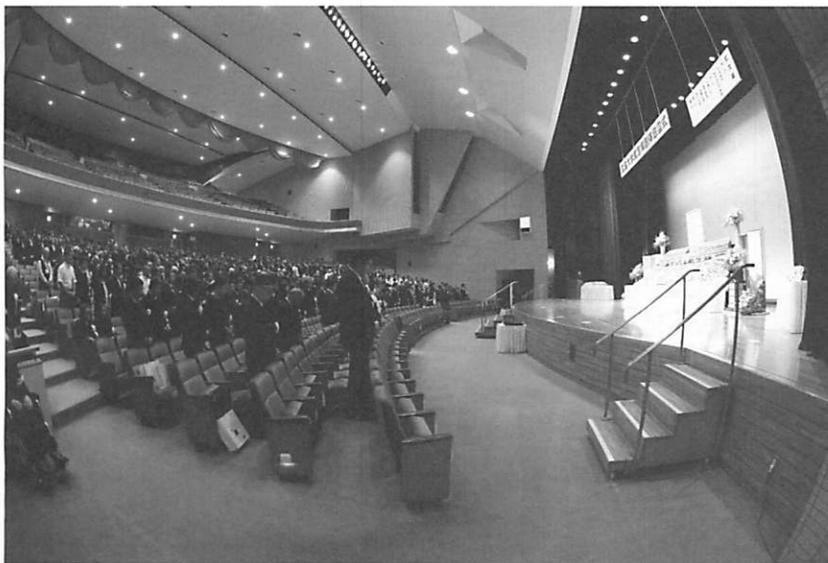
解剖実習が始まって二週間ほど経ったところ、『筑波しらぎく』の冊子をあらためて手に取り読み入ってしまいました。お孫さんが日々成長する様子を眺めるのが今の生きがい、と書かれている方や、長く続けてこられたお仕事について書かれている方、生きることとは何故こんなにも辛いことばかりなのか、人は何のために生きるのか、と書かれている方など、お一人おひとりの思いのこもった文章を拝読し、自分の祖母のことを思い出さずにいられませんでした。実習の期間中、予習復習や割出の作業に追われがちな私でしたが、その間も『筑波しらぎく』で拝読した内容は常に頭の片隅にあったように思

いますし、これからも残り続けるだろうと思います。

私はすでに四人の祖父母や義父、伯父を亡くし、若い後輩を亡くしたこともあり、お通夜から葬送、火葬、そしてお骨を拾い、家に帰り……という流れを何度か経験しました。そのようなときやはり、遺体を囲んで家族で過ごす時間や、冷たくなった手や額に最後に触れる時や、納棺し、お顔を最後に見る時というのは、本当に大切な時間だという実感があります。それを敢えて最小限にとどめ、医学生のために身を挺してくださったということについて、言い表せないほどの有り難さを感じます。そしてそのこと自体が、今後私たちがそれぞれに迎えるであろう人生上の、あるいは仕事上の「クライシス」に際して、一つの大きな支えになるのではないかと思います。

ご献体者に触れさせていただかなければ何も学べなかつたようにさえ思えます。アトラスの詳細で綺麗なイラストはあくまで「アイデア」であると考えなさい、と話してくださった先生がいらっしゃいました。たしかに実際の

体内の様子は全くと言ってよいほど別物でした。理想的な断面が最初から与えられるわけがなく、実際に皮膚から、さまざまな組織・器官の弾性や力学的強度を感じながら連続的に体内を探検させていただく機会がなければ、まるで地図だけを見て地球を理解したと思うことと同じだと、今は思います。将来どの診療科に進むかは未定ですが、



きつとどの診療科に進んでも解剖実習のことを思い出すのだろう、そして、あの時もつと見させていたいただいたらよかったと思うに違いない、などと想像しながら実習を進めました。

印象に残っているのは、それぞれの組織・器官の「感触」や「たたずまい」です。体内各所において、動脈と静脈、神経繊維と神経節、リンパ管とリンパ節、筋膜、靭帯、筋肉、骨、それらを包む脂肪組織などは、それぞれが特徴的な「丈夫さ」や「柔らかさ」をもってそこにありました。また一口に「骨」と言っても、例えば肋骨と鎖骨では硬さが全く異なり、それはそれぞれの機能に応じたものと理解されました。実習期間中、そのような「感触」を感じ「たたずまい」を眺め解釈することに夢中になっていったように思います。手足の指につながる長い屈筋や伸筋の腱がいかにか美しく丈夫であるか、それが腱鞘によっていかに動きやすくされているか、支帯によっていかに支えられているか、ということや、壁側心膜を開いて心外膜に包まれた心臓に触れたときの滑らかさと大きさなどにも感動しま

した。大動脈弓とそれに続く下行大動脈や、腰椎の椎骨、梨状筋の下から伸び出した坐骨神経、腎臓を包む脂肪被膜の手厚さなど、大きく力強い構造も印象的でしたし、側頭骨錐体部の中にかろうじて見出した耳小骨の並びの三次元的な方角がイメージとはほとんど逆であることに気づいた時に「わかった」という感動や、卵円孔がたしかに卵円形で正円孔がたしかに正円形であることを確かめた時の「たしかに」という感動など、我ながら無邪気に学ばせていただいたと思うと同時に、そのためだけのご猥体ではないこともあらためて認識したように思います。私たちが今後、臨床において一人でも多くの方の助けとなれるように、また研究において一つでも多くの進歩をもたらすことができるように、との激励をうけたものと考え、今後の日々を過ごしていこうと思います。思えば、医療だけでなく、衣食住をはじめとする社会のあらゆる面において、私たちは無数の命に支えられて生きているのだと思います。そして私たちもその一つになっていくのだと思います。



納棺の際にお贈りするお花を、班を代表して購入する係を引き受けられたことが正直嬉しく、白菊が一本では寂しい気がして、二本にしてもらい、それを中心に季節の花のりんどうやコスモスを加えた花束を作ってもらって持参しました。納棺の時には、やはり自分の祖父母のときのことを思い出し、また、先生方の中に解剖実習の期間中

にご親族を亡くされた方がいらつしやり、そのことを話してくださったことも大きく、ただひたすら「与えて」いただいたということをあらためて思いました。そしてもっとたくさん吸収すべきであったのに、という反省も感じました。せめて今後、医師に向けての学びのあらゆる場面で、実習のときの、自分の目で見て手で触らせていただいた記憶を反芻しながら学んでいこうと思います。

COVID-19のパンデミックという歴史的な状況下において実習の実現と運営のために見えないところでご尽力をいただきました教職員の皆様に、感謝を申し上げます。有難うございました。そして、私たちの実習が終わるまで長い期間を待ってくださいましたご献体者にご親族の皆様にも、深く、感謝を申し上げます。有難うございました。



新会員

会員番号	氏名
二三四九	山室 堯
二三五一	眞木 一秋
二三五二	田中 新三
二三五三	佐藤 三郎
二三五四	磯貝 敏江
二三五五	北村 康久
二三五六	金原 ヒロ
二三五七	鶴見 義雄
二三五八	松木 祐一
二三五九	本多 静江
二三六〇	佐藤 まき子
二三六一	石井 五郎
二三六二	高橋 キクヨ
二三六三	武藤 眞知子
二三六四	小形 和江
二三六五	中村 和子
二三六六	小田原 真代
二三六七	小川 とし子
二三七〇	菊池 正紀
二三七一	来栖 延子
二三七二	福村 厚信

二三七三	初鳥 すみ子
二三七四	秋葉 清子
二三七五	岸 恒俊
二三七六	本田 秀雄
二三七七	成島 京子
二三七八	森田 幸子
二三七九	高橋 喜久雄
二三八一	松宮 憲治
二三八二	松宮 由李
二三八三	兵藤 保
二三八四	阿部 寿美子
二三八五	北崎 悦子
二三八六	青山 文男
二三八七	田中 秀明
二三八八	田中 佐代子
二三八九	石島 陽子
二三九〇	稲田 安子
二三九一	濱田 篤信
二三九二	松井 俊浩
二三九三	松井 留倫子
二三九四	館 すすみ子
二三九五	加藤 利勝
二三九六	坂本 光
二三九七	大浦 正子
二三九八	加藤 眞澄
二三九九	来栖 功



成願会員

会員番号	氏名	成願年月日
一九三二	故 助川 吉江	元・九・一一
一六八二	故 高尾 真季	元・九・一五
一八二三	故 中村謙太郎	元・九・二五
七五三	故 高瀬きよみ	元・一〇・四
四二六	故 田中 一良	元・一〇・五
二三五〇	故 山室 尚子	元・一〇・一三
一二七九	故 杉浦 陽子	元・一〇・一七
二二六八	故 高田 英昭	元・一〇・二九
一八三九	故 長嶋壽美子	元・一一・一
一〇五四	故 矢部 幸雄	元・一一・二七
一五四六	故 三崎みや子	元・一一・三〇
一七二七	故 大内 一枝	元・一一・一一
一九八五	故 加倉井和子	元・一二・二五
七八九	故 稲田美代子	元・一二・三一
一七三四	故 上野 清	元・一二・三一
二二六八	故 出澤 悦子	二・一・二
二二三五	故 安田 知子	二・一・三
一五九六	故 高橋キヌ子	二・一・六
二二四〇	故 池田 静子	二・一・八
九〇三	故 大田ミツ子	二・一・一七

一一九三	故 土屋 種子	二・一・二九
一六一六	故 加藤 節	二・一・三〇
一五六〇	故 渋谷 一雄	二・二・六
一三六九	故 山田 高見	二・二・七
一九〇〇	故 小木 隆二	二・二・八
一八四一	故 鈴木 友一	二・二・一〇
一八六二	故 赤津順三郎	二・三・二四
一八八三	故 杉本 和大	二・三・二五
一七三一	故 西塚 ハギ	二・三・二八
一七八八	故 山内 勝昭	二・四・六
九一九	故 守屋 多美	二・六・七
一四四〇	故 佐々木 修	二・六・八
一三三〇	故 本田 善子	二・六・八
一九一〇	故 下村 征子	二・六・二〇
二二九五	故 設楽 勝	二・六・二三
一五九九	故 西田 綾子	二・七・二
一六九九	故 市村 武	二・七・三
六〇七	故 松岡 濱路	二・七・六
一九一五	故 小根山正代	二・七・一一
六二六	故 谷野美都子	二・七・一六
二二四五	故 阿部 光子	二・七・二六



筑波大学白菊会 規約

(名称及び事務所)

第一条 本会は筑波大学白菊会と称し、その事務所を筑波大学医学群内に置く。

(目的)

第二条 本会は会員の親睦と献体運動の推進を図ると共に、医学の発展と人類の福祉に貢献するために、会員の遺体を筑波大学医学群に寄贈することを目的とする。

(事業)

第三条 本会は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1、 会員の親睦
- 2、 献体運動の推進
- 3、 会報の発行
- 4、 その他、本会の目的を達成するために必要な事業

(会員)

第四条 本会の目的及び事業に賛同し、自らの遺体を寄贈する目的を持って入会を申し出た者を会員とする。ただし、家族、またはこれと同様の者の同意を得た者でなければならない。会員は本人の希望により退会することができる。

(役員)

第五条 本会に次の役員を置く。

- 1、 会長 1 名、理事長 1 名、理事若干名、幹事若干名
- 2、 会長は、筑波大学医学群長が務める。
- 3、 理事は、筑波大学医学群解剖学担当の教員が務め、理事長の選出は、理事の互選による。
- 4、 会長は本会を代表し、会務を総理する。
- 5、 理事長は会務を統括し、理事は本会の運営に関して協議し会務を分担する。
- 6、 幹事は筑波大学医学群の事務職員の中から、会長が委嘱し、庶務及び会計を処理する。

(任期)

第六条 役員任期は 2 年とする。但し、再任を妨げない。

(顧問)

第七条 本会に顧問若干名を置くことができる。顧問は、理事会の議決により、会長がこれを委嘱する。その任期は 1 年とする。但し、再任を妨げない。

(会議)

第八条 総会は、年 1 回会長が召集し、事業報告及び会員の意見交換の場とする。

(会計年度)

第九条 本会の会計年度は、4 月 1 日から翌年 3 月 31 日までとする。

(経費)

第十条 本会の経費は、寄付その他の収入をもってこれに充てる。

(補則)

第十一条 この会則に定めるものの他、本会の運営に関して必要な事項は、理事の同意を得て会長が定める。

(感謝状)

第十二条 献体された遺族に対し、会長（医学群長）より感謝状を交付する。

付則

この規約は、昭和 58 年 4 月 1 日から施行する。

この改正規約は、平成 24 年 4 月 1 日から施行する。

筑波大学白菊会慰霊碑案内図



筑波大学白菊会慰霊塔案内図



(交通ご案内)

車利用の場合(常磐自動車道)

- 土浦北ICから15分
- 桜土浦ICから23分

高速バス(つくば号)利用の場合

- 東京駅八重洲南口(②のりば)から「筑波大学行き」乗車～つくばセンターまで70分

鉄道・バス利用の場合

- 常磐線土浦駅西口(③のりば) 関東鉄道バス「つくばセンター行き」乗車～つくばセンターで下記のつくバスに乗り継ぎ
- つくばエクスプレス(TX)つくば駅隣接のつくばセンター(③のりば)つくバス・北部シャトル「筑波山行き」乗車～「大穂窓口センター」下車

(所在地) 〒300-3253 茨城県つくば市大曾根根本333
(お問い合わせ) 029(864)6606

・お車でお越しの際は、上記の所在地あるいは電話番号をナビにご入力願います

(交通ご案内)

車利用の場合(常磐自動車道)

- 土浦北ICから20分
- 桜土浦ICから20分

高速バス(つくば号)利用の場合

- 東京駅八重洲南口(②のりば)から「筑波大学行き」乗車～つくばセンターまで70分

鉄道・バス利用の場合

- 常磐線土浦駅西口(③のりば) 関東鉄道バス「筑波大学中央行き」乗車～「平砂学生宿舎前」下車
- つくばエクスプレス(TX)つくば駅隣接のつくばセンター(⑥のりば) 関東鉄道バス「筑波大学中央行き」または大学循環バス(右回り)乗車～「平砂学生宿舎前」下車

お願い

ご住所を変更された場合は、新しい住所を白菊会事務局（電話 〇二九一八五三―三三三三）へお知らせ下さい。住所が分からずご連絡がとれないケースが増えております。



「会員が亡くなられた時に、していただくこと」 ご遺族の方々へのお願いです

一、ご遺体を大学へ引渡す時刻の打合わせ
まずご遺族の間で次のことをお決めになって下さい。

- (1) お通夜をせずに直ちに引渡す
- (2) お通夜をしてから引渡す
- (3) お通夜をして告別式をすませてから引渡す

右のうちどれかにきまりましたならば筑波大学献体事務室の担当者（電話 〇二九・八五三・三三三〇）と、ご遺体引渡し場所と時刻を打合わせてください。休日・夜間のお引取は大鵬社（電話 〇二九・八二一・八三三三）に直接連絡下さい。

ご遺体の輸送は大学がお引受けし、原則として自動車がお迎えにあがりますし、(1)の場合には必要があれば大学からお棺を持参することになっていますがこの点も打合わせて下さい。

（注）ご遺体の大学への引渡しは二十四時間を超えるときはお棺の中へドライアイスを入れ、ご遺体の保存に御留意下さい。

二、必要書類の用意

- (1) 「埋火葬許可証」を急いでお取り下さい。これは医師の死亡診断書をそえて市町村役場へ「死亡届」を出すときにももらえます。
- (2) 「埋火葬許可証」の記入の際、火葬場所は県内の方は最寄りの火葬場所をご記入願います。尚、県外の方は土浦市田中二丁目一六番三三三号、土浦市営斎場、火葬年月日は一年後として下さい。
- (3) 「解剖に関する遺族の承諾書」については大学から書式を持参しますので、ご署名とご捺印をお願いいたします。